

02・バッドエンド 「選択：外へ出る」

『01・共通ルート』から三日後。

冬のある日、十八時ごろ。

主人公、マンションから数キロほど歩いたところを、一人ふらついている。

雫が姿を消してから数日。

とうとう雫の不在に耐え切れなくなった主人公は、彼女の言いつけを破って、マンションの外へと出てしまった。

とはいっても『あの部屋では生活するのが困難で、やむをえなかった』というわけではない。

食事は冷蔵庫の中にいくらでも用意されていたし、水も、電気も、ガスも通常通り通っていた。

また、それらはすべて主人公が自由に使えるようになっており、主人公は『外に出られない事』『外界と連絡が取れず、情報も集められない事』以外は、普段と何も変わらない生活ができたのだ。

だが、主人公にはこれが耐えられなかった。

外で何が起きているかわからない事、そして、そんな中雫が出て行った事が、とてもつらかったのだ。

だから主人公は約束を破り、雫との関係が悪化する事よりも、思うまま行動する道を選んだ。

雫を信じる事よりも、『不安でじっとしてられない』という、己の感情を優先してしまったのだ。

だが、『不安でじっとしていられなかった』結果、主人公が目にしたものは、想像を絶していた。

三十分も歩く頃には、雫が『部屋から出るな』と言った理由も、骨身に染みてわかってくる。

今からでもマンションに戻るべきだろうか。おそらくそれが正しいのだろう。だが、もう遅い気がする。

今になって雫の真意を理解したところで、すべてはもう、手遅れに思えた。

なぜなら……。

【最初から最後まで流す】

【繰り返し流す】

【0―5秒ほど流してSE2】

【その後、小さな音量でトラック終了まで流し続ける】

SE2 雫の足音01

【最初から最後まで流す】

【だんだん近づいてくる】

「穏やかに。これまで通りの調子で。」

『帰宅したが、主人公がリビングに居なかったので探した。すると、自室にいた』  
というくらいの様子で」

ああ。ここに居たんだね」

ん、ああ。ここに居たん」

するとそこへ、背後から雫が声をかけてきた。

主人公はその声を聞いた瞬間『姿を消す前と、何も変わっていない』と思った。

優しい声音にむしろ安心し、自分が約束を破った事も忘れて、再会の喜びに涙ぐんだ。

〈主人公〉

「雫……!」

だが、期待を持って振り向いた時、それは間違いであった事を理解する。  
雫はこれまで通り、静かな雰囲気なたたえていた。  
だがそこには、冷たい怒りが滲んでいるように見える。

「穏やかに。これまで通りの調子で。」

『リビングから自室に移動するなら、リビングの電気は消しておいてほしい』  
と、たしなめるくらいの様子で」

言ったよね。部屋の中に居てって。

言ったやんな。部屋ん中に居てって。

『主人公が節電に協力しないから、電気代が上がっちゃったって、この前説明したでしょう』  
とでも言うような調子で」

もうわかると思うけど。この世界、もうダメなの。  
もう分かると思うけど。この世界、もうダメやねん。

『二人暮らしなんだから、お互いに気を付けて、光熱費を節約しようよ』

とでも言うような調子で』

私とあなたしか居ないの。

うちとあんたしか居らん。

『でも節電の件は、あんまりしつこく言うと思われ、嫌だろから、言わないようにしてたのに』

とでも言うような調子で』

でも、そうだったら、あなたは嫌だろうって思ったから。

けど、そうなると、あんた嫌やろ思うたから。

『私だけが気を付けてるって、何だか変じゃない?』

とでも言うように、少しすねるように、ほんの少しだけ怒って』

私は、何とかしたいって思ってた。

うち、何とかせな思ってた。

【ここでトーンが変わる。

『すごく残念だ』という感じで』

今回も……』

今回も……』

しばしの沈黙。

「トーンが先ほどまでに戻る。『少しがっかりしている』程度の声音で。

『もうこれ以上、節電の件で怒りたくないよ』とでも言うような感じで」

なの……何で外出たの？

やのに……何で外でたん？

何で私の事、信じてくれなかったの？」

なんでうちの事、信じてくれへんかったん？」

しばしの沈黙。

主人公は、言葉を発する事すらできずにいる。

「ぼそっと。さほど怒っていないかのように。」

『なんで何回言っても忘れちゃうかなあ』程度の怒りしかないかのように  
悪い脚。

『こうなったら、今度電気消し忘れたら、罰金とかにしようか』

という位の提案をしているかのように」

こうなったら、もう二度と、外に出たいなんて思わないようにしないとね。

こおなったら、もう二度と、外出たいなんて思わんようにしないとあかな。  
『私一人で家計の事気を付けてるの、疲れちゃった。』

そもそも節約頑張ってるの、二人で旅行に行くためじゃん。

別に私は、お金たまらなくて、旅行行けなくなってもそれでいいけど？』  
『らしいの落胆』

私も、もう頑張るの疲れちゃった。

私も、もう頑張るん疲れたわ。

私達二人で暮らすだけだったら、あれもこれも、殺す必要ないし。

うちら二人で暮らすんやったら、あれもこれも、殺す必要ないし。

このままでも、私はそれでいいよ」

このままでも、うちそれでいいで」

〈主人公〉

「……雫。ごめん。私が間違ってた。

全部私がいけなかった。お願い。謝るから。だから……」

主人公達以外のすべての生き物が消えうせた街で、悲痛な謝罪の声が聞こえる。

もはやそれを聞く者はいないが、もしいたとしたら、とても二人の関係を『友人』だと

は思わないだろう。

主人公の声は震え、怯え、今にも泣きだしそうだ。

これ以上の醜態をさらすのも、もはや時間の問題だろう。

主人公はただただ、雫が恐ろしかった。

傷だらけで、血まみれで。無感情な目で自分を見下ろす雫が。

そんな彼女が次に狙うのは、自分に違いない。

そう思い込んでしまうほど、今の雫は恐ろしかったのである。

「主人公の言葉を完全に無視して。

ここから最後のセリフまでトーンが変わる。まずは※マークまでゆっくりと、『すごく残念だ』という感じで」

だって怖いもん。

だって怖いもん。

世界が元に戻ったら、あなたが他の子の所へ行きそうまで。

世界が元に戻ったら、あんた他の子んどこ行きそうまで。

だって嘘つきだもん。あなた。

やって嘘つきやもん。あんた。

浮気されたら嫌だよ。私」※



浮気されんの嫌やで。私」

### SE3 雫の足音02

【最初から最後まで流す】

【さらにだんだん近づいてくる】

だが、先に『怖い』と口にしたのは雫の方だった。  
一体、今更何を恐れるというのだろう。

これだけ主人公を肉体的にも精神的にも支配して、どこに恐怖があるのだろう。  
主人公はそう思ったが……。

雫はただ静かに主人公に近づき、また、左耳にささやいた。

「【次の※マークまで、すべて『左耳にささやく』。

また、一言一言、ゆっくりめに、はつきり話す】

だから。

やから。

帰ろう。

帰る。

【ひときわゆっくりと】

ずつ、と。

ずつ、と。

【少し間をあけてから】

二人で。あの部屋に居よう。

二人で。あの部屋に居ろう。

【特に静かに、はつきりと念を押す】

ね？」

な？」

〈主人公〉

「……はは。はは。あはは……」

すぐそばに雫の吐息を感じながら、主人公は無感動に笑い、ぼんやりと空を見上げる。

『多分、自分が外へ出て、直接外の景色を見るのはこれが最後だろう』

そう思ったからだ。

だが、冬の空はすでに暗い。おまけにこの惨状だ。外には灯りすらまばらである。

だから、目を凝らしても……。

もう、ほとんど何も見えなかった。

ここでフェードアウトして終了。